

凌霜菊の井雙紙卷之八

江戸戯作者 教訓亭主人 爲永春水著



秋さびき臂笠雨あきさびきひらぎさゝあめ 袖ぬき道ゆくそでぬきみちゆく ひとともひととも 同きどうき

ある一の官村あるいちのくわんむら の片のぺん ありとありと 荒あはれ ころころ 垣かき ぬぬ 苔こけ 生なま けけ ころころ

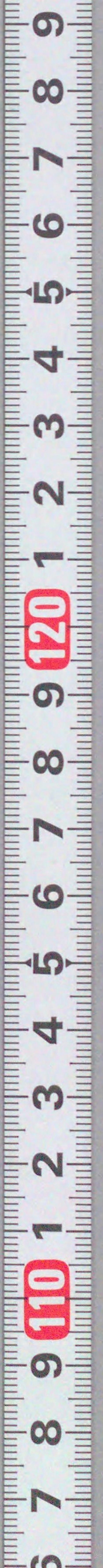
柴しば の折戸おれど とくまへとくまへ へへ 是これ ぞ眼め 医師いし の寓居ゆうきょ

かろかろ。そへそへ 来き うう 旅人りょじん ハハ 彼かれ 法ほふ 三郎さんらう 於お 君きみ のの 両りやう 個こ

押おし ころころ 入いれ 来き ぬぬ 五い 十じゅう 余あま 歳さい のの 老らう 女にょ なるなる。

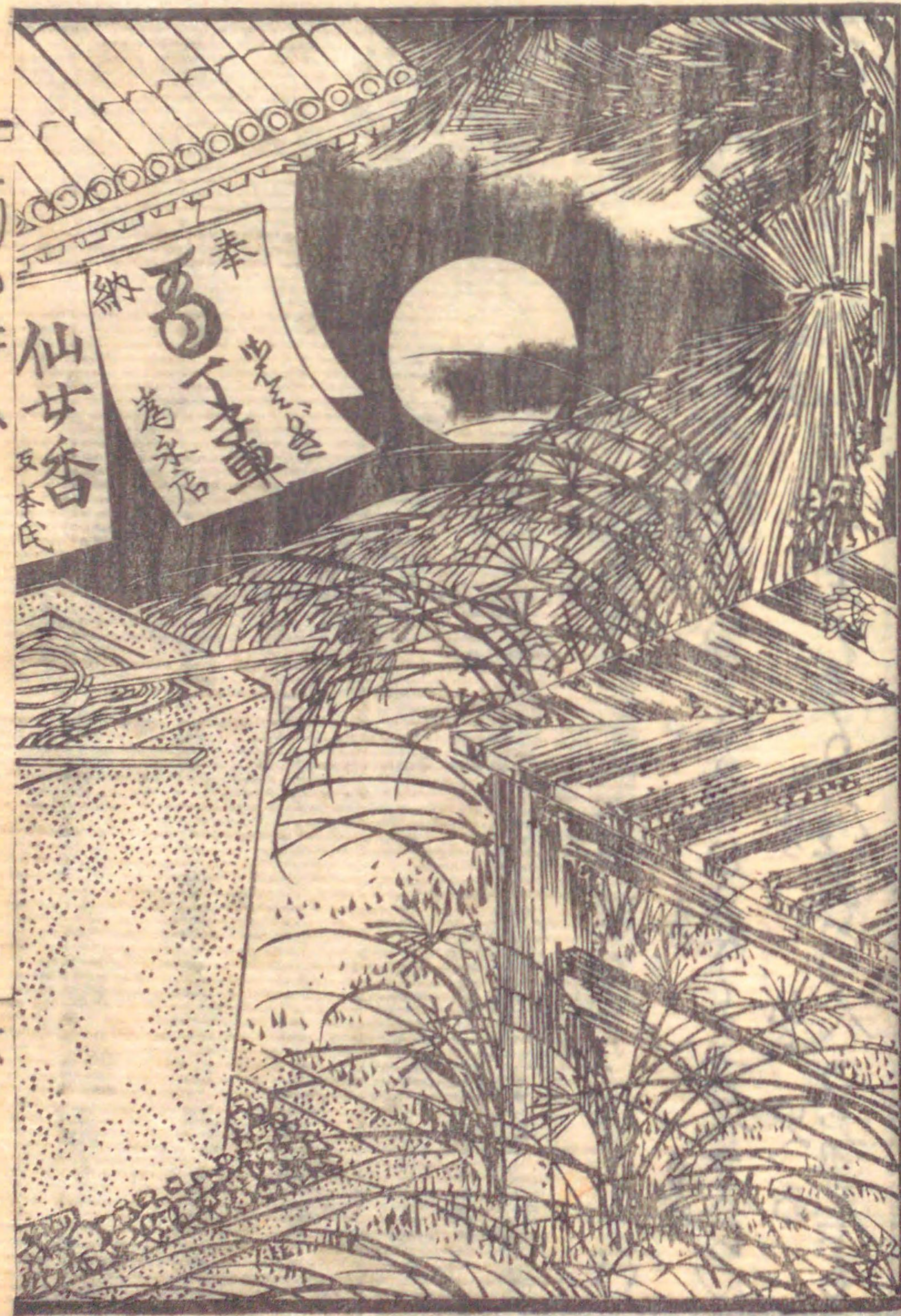
菊の井

三



信別飯田入出張として齋活としてくられた
 所あるやど高妙なる法どやといふてりま新八と
 りつと入ハ諏訪きるとや入お抱めらるる
 りつと園まうくマラくこれくおんくるされ
 森これハざんくは源切み委しことすまを
 物疼あさうがうじざりすは。このか医共も
 おらひこヤク折うく集うこのみモシお
 さぬらうへみ。おはむあひのあひしうら。そん

中江まふあへいほ其師ちぬらびらるげらま
 信正らわれれて出羨想やうけられてまうら
 齋活とさうくまらる百人が百人るまらる
 稀代のことらるる連合も研されまうら
 その全廻りびうることえ録のころとやうら



八つんへぬお君とつぎ。豆の運びも果敢ぞくは。
 思ひぬ徑小伸冷と。月八全く暮さければ。
 かん何ふやう名も知れ左の方とくんとせ。其。
 長本くくる大樹の指天を纏ひて路暗く右ハ
 谷の漲るに流せと。叢木碎くる浪のさる遙ふ
 波ゆる猿の姿。猿客の衣襟を寒くくしむ。
 兩個ハ今さう注方るく。ゆをまへ方へ戻らん
 ぬ。路さへ凡二三里をり。住む六人の家居も

む。たのむとく。是より幾干の路を割く。おの
 や。そまいた計と。急る人。おるく。は。を。運。更。お。夜
 と矢のく。團で果つ。あつと。こ。ん。れ。ば。六。庚
 申と。あ。れ。る。もの。り。と。て。か。つ。あ。つ。古。社。ま。へ。不
 建。く。る。石。橋。の。猿。を。彫。り。へ。團。の。く。く。の。法。
 三郎ハお君みひひ。團へ。道。み。ま。ま。よ。の。く。
 今更詮方るき。もの。つ。此。呼。る。る。堂。み。夜。を
 明きんや。こ。ん。れ。ば。古。く。る。社。み。く。團。の。風。の。燈



一六
 一七
 一八
 一九
 二〇
 二一
 二二
 二三
 二四
 二五
 二六
 二七
 二八
 二九
 三〇
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四一
 四二
 四三
 四四
 四五
 四六
 四七
 四八
 四九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

一六
 一七
 一八
 一九
 二〇
 二一
 二二
 二三
 二四
 二五
 二六
 二七
 二八
 二九
 三〇
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四一
 四二
 四三
 四四
 四五
 四六
 四七
 四八
 四九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

らんまてい^{らんまてい}は^はは^はは^はの^の稚子^{ちご}ま^まれ^れど^ど室^{むろ}く^く此^こ
 呼^こみ^み捨^すて^てる^る見^みく^く狐^こ兔^うの^の餅^{もち}食^くと^とる^るん^んを^を。
 思^{おも}ひ^ひぐ^ぐこ^こ思^{おも}ひ^ひつ^つの^の計^{けい}當^あふ^ふら^らう^う入^いら^ら。
 お^お君^{きみ}よ^よう^うく^くと^とお^おが^がれ^れば^ばお^お君^{きみ}ハ^ハ彼^かれ^れる^るれ^れぐ^ぐり^り。
 泪^{なみだ}と^と汗^{あせ}あ^あぐ^ぐ其^{その}子^こを^を捨^すて^てり^り「[「]さ^さし^しく^くそ^それ^れハ^ハ可^か
 愛^{あい}た^たら^らう^うの^の入^いら^らま^まら^らう^うの^の又^{また}傍^{わらわ}傍^{わらわ}の^の事^{こと}
 び^びら^らの^のあ^あま^まの^の骨^{ほね}お^おひ^ひで^でせ^せめ^めて^て死^し體^{たい}と^とそ^そ
 ろ^ろく^く埋^うめ^めて^て選^{せん}で^でん^んた^たれ^れら^らう^うの^のふ^ふん^んこ^こん^んと^と捨^すて^て

居^いる^る氣^きハ^ハる^るけ^けれ^れど^ど肌^はら^らの^のと^と温^あち^ちく^く中^なか^かに^に抱^かか^かへ^へト^ト
 人^{ひと}の^の衣^えれ^れも^も吾^{われ}力^{ちから}の^のう^うみ^みつ^つぬ^ぬさ^され^れて^てる^るど^どう^うに^に書^かく^く
 落^おち^ちて^て泪^{なみだ}と^と汗^{あせ}を^をこ^こん^んの^のう^うに^に流^{なが}す^す郎^{らう}も^も点^{てん}で^で「[「]あ^あの^の
 け^け子^こを^を捨^すて^てる^るこ^こと^と肝^{かん}心^{しん}の^の乳^ちハ^ハる^る」[」]は^は方^はも^もる^るか^か
 思^{おも}ひ^ひま^ま〜[〜]と^とい^いえ^えれ^れば^ばん^んの^のど^ども^も長^{なが}れ^れぬ^ぬら^らう^うつ^つれ^れて^て
 美^みま^まぶ^ぶお^おま^ま入^いら^らぬ^ぬそ^その^のあ^あら^ら〜[〜]や^やる^るも^も他^たを^をそ^そん^んら^らう^う
 け^け子^この^の母^{はは}親^{おや}ハ^ハそ^その^のら^らを^を握^{にぎ}り^りて^て握^{にぎ}り^りま^ませ^せう^うマ^マら^らく^く泣^なか^かを^を
 泣^なか^か〜[〜]と^とい^いえ^える^るこ^この^の被^ひふ^ふぬ^ぬの^のき^き嫁^{よめ}ん^んと^と



それど鋤もろく。敵もろければ詮方なく彼彼
差をひき後々傷る。山は東を拂ひ去るゆゑ
堀をこしてゆき死を引をこしき所へ掘り
東面をえまら。まづらの石を二ツ三ツ
あげて上ふ載せりの雲内ふまくり。ヤレ
衝く押す。こころは子ハおのゝり。おま
の乳と一もまづつて。可きさくもすやく。乳
ハ祝の起るもあくるのど。ホニ子は六傳にわと

昔の喻入もま埋で入る。そまはまあて今社あれ
乳がまてハ困るとま尻の。そまは各傳も先
刻う。いろくおのりて居るけれど。まづ今夜ハ
斯くて居る。おのり入里ぐ。乳とまら
破せまう。ヤレく大まふ。苦勞まら。ホニ三人の
う入で入る。今日け順とま小七さるや。ま
あも深り食うて。強く入る。これど方と
歩みうち。そまはく。まは。まは。まは。

二巻の井ノ

三十一







此方も面影の眼みゆるしついでにちと
 是を物ぐる怪しきことおもしろく
 夜も明けとられ鶏夫のまきしゆら
 人を人里あり飲ひのへと在り三郎が
 け起しつとまかんとあつた袖を
 つつ三郎喜三郎との世思の母が二人が
 入るのへ。ホニ姪のちと魂とや
 めのが寝み来このをぬらうとそのお

所へ往くよとて跡を尋ねてせめてお経の
 口も唱へておと思ふうとまごを侮つれ
 往く一あるおまごこれハはもつともサ
 びりまはト。まごを提つて先みこち尾
 て葬へ前へこれバ町寧みおまごこれ
 おぐ。法花経等の達多品を高くう漢
 痛する。そのくこの達多品ハ娑竭羅龍王の
 女鬼八歳うと智あるく様定みりて

法ほう不ふ達たつ。早はやくも苦く搜そうを降おのひひ。あま
女人にょにんふふししと成なり仏ぶつせせ。故ゆゑ縁ゆかりるるりらや環たまりり於お
經きやう文ぶんななうう。ささるるふふよよううと此この卷まきを覺おぼへへ。ままくくふふ
護まもららるるべべ。喜き三さん郎らうハ此このううららふふ谷やまみみりり水みづ
を汲く。の佛ぶつああふふ向むかつつ。おおままがが臨りんみみりり
ておおるるべべ。念ねんど居ゐるる。墓むのの後のちふふ一いちツつの石いし
あり。高たかさ一丈いちじやうむむりり。そそののささるる女にょのの胸むねふふ似に
て乳ちちううと思おもふふもののささりりのの喜き三さん郎らうハ佳きとと思おもふふ

昨夜ちゆうや此このああふふ至いたつつ。ささるる月つきささ入いりり。壁かべくく。ああららね
ざざううくく大だい石いしとと思おもふふ。ここのの証しやう。ききままるるままくく
徒た儂じやうのの墓む下したとと後のちよよくく思おもふふ。怪あやししいいるる乳ちちのの
如ごとききのの先さきよりよりしして清きよみみののどどくくああららるる。ささららにに自みづからら
ああて二ふた條じやうのの糸いとをを引ひくく。どどくくるるりり夢ゆめののささきき今いま
とと思おもふふ。おおれれババ在ありり三さん郎らうハハ其そのここにに立たちち。ううららみみ出で
る。自みづからら清きよみみををささるる。ふふろろくくれれババ温ぬるる。ここのの乳ちちふふままをを
ここのの乳ちち汁じゆみみかかしし。ももううささるる

二巻の終

一







彼^うの酒^{さけ}屋^やに説^{たま}話^わして見^ま入^り後^{のち}止^どめ^めの
 さん^{さん}と^と使^{つか}り^り喜^{よろこ}三^{さん}郎^{らう}酒^{さけ}屋^やに^に至^{いた}り^りと^と女^め々^めと^と
 を^を恃^たり^りく^くバ^バその家^やの^のこ^こも^も美^み知^ちし^しと^と氣^き遣^やは^はく
 何^{なに}も^も入^いる^るの^のま^まを^を越^こへ^へと^と入^いり^りと^とひ^ひけ^けら^らの^の
 在^ま二^に郎^{らう}ハ^ハお^お柔^な不^ふ斯^すと^と物^{もの}が^がう^うり^り稚^ち子^こも^も二^に人^{にん}を^を
 其^{その}所^{ところ}の^の家^やに^に恃^たり^りく^くま^ま草^{くさ}鞋^せを^をく^くま^まも^も遠^{とほ}く^く
 去^いく^く眼^{まなこ}を^を告^つげ^げと^と走^はり^りと^と知^しぬ^ぬく^くて^てお^お柔^なハ^ハ人^{ひと}を^を在^ま
 ひ^ひ彼^か乳^ちと^とき^きを^をせ^せつ^つ其^{その}日^ひハ^ハ此^{こゝ}所^{ところ}ハ^ハ酒^{さけ}の^の味^{あじ}も^も佳^よし^し也^{なり}

奇^き異^いあ^ある^るの^のり^りと^と里^{さと}の^の人^{ひと}々^々評^{ひょう}判^{はん}して^{して}その^{その}推^{おし}
 子^こと^とい^いふ^ふ来^きる^る人^{ひと}も^も数^{かず}ま^まの^のま^まに^にお^お柔^なも^も今^{いま}ハ^ハう^う
 さ^さく^く思^{おも}へ^へど^ど只^{ただ}二^に三^{さん}日^{にち}の^のつ^つの^のま^まれ^れば^ばと^とい^いふ^ふお^お柔^なは^は
 居^いる^る一^{ひと}つ^つの^の村^{むら}の^の者^{もの}み^みあ^あら^らね^ねど^ど精^{せい}変^{へん}
 者^{もの}六^むと^とよ^よぶ^ぶえ^えの^のり^り村^{むら}の^の者^{もの}み^みあ^あら^らね^ねど^ど精^{せい}変^{へん}
 あ^あど^どす^する^る群^{ぐん}み^み入^いる^るそ^その^のり^りと^とい^いふ^ふ強^{つよ}き^き漢^{かん}の^のり^り
 此^{こゝ}所^{ところ}ハ^ハ豊^{とよ}の^の穀^{こく}は^はあ^ある^る酒^{さけ}店^たん^んに^に来^きる^るこ^こが^が
 ち^ちろ^ろと^と容^{よう}を^をつ^つら^らく^くこ^この^のり^りと^とい^いふ^ふ稀^{まれ}る^る美^み人^{ひと}の^のり^りけ

二葉の井

十一

且つ世にいつくも^{あつた}徳^の徳^を本^に残^{して}た^りか^らい^て

 ぐとみは^た女^{あり}あるこそ^たは^らい^はら^し荷^をか^し

 ま^つふ^はい^はら^しその^う人^{ごと}く^年一^ツた^のと^投げ^ば又^も

 よ^き務^負の^蔓う^ると^一個^笑して^立飯^のそ^の

 夜^も更^そく^丑波^じり^脊戸^{より}と^みお^び入^る

 え^こう^り影^の工^とる^れバ^戸の^積ま^入堅^くび^ら

 い^はら^どさ^ぬぐ^ふ辛^苦る^くら^いの^上ふ^一日^人

 の^出入^{して}彼^の是^のと^余を^教る^がお^夜食^をま

へ^あら^うと^して^大く^し響^ひ喜^ぶと^身が^般の^ま

 小^七が^容ま^よも^こう^こん^のと^樂し^みお^もい^だ

 不^成年^のの^りび^いら^ひれ^が稚^子が^寐け^る候^に

 小^敷寢^して^うの^無寝^もぐ^とく^と一^下間^の

 う^らい^おび^さ人^まよ^のま^をを^臥ら^しけ^と

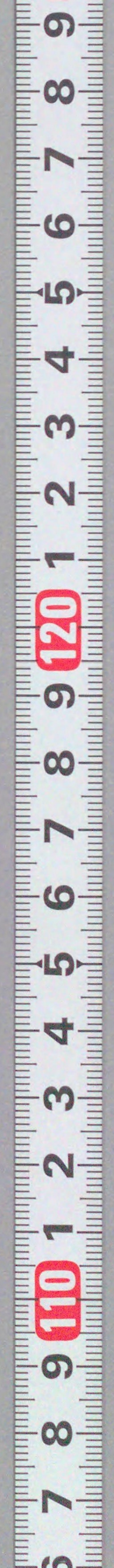
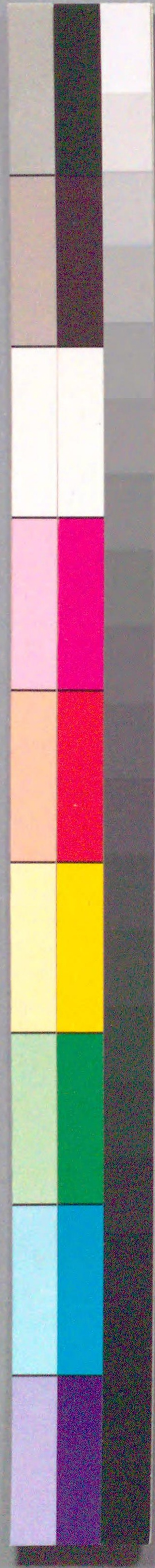
菊の井雙帝卷之八 終

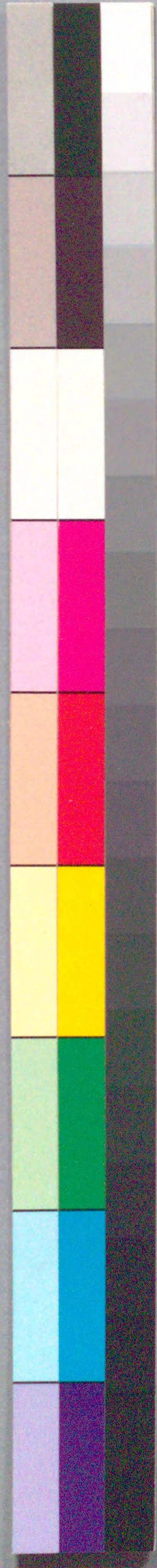


208
12
682

二
海
の
キ
ハ

十
四





国立国会図書館 菊廼井草紙 4編 208-682



ガラス使用

